子供の持つ「内→外」意識の変容をめぐって

心が育つということの(3)

幼児の持つ「内→外」意識の変容をめぐって

これまで私は三回に渡って「マーカー」という言葉を中心に掘り下げて、幼児が未知な空間、モノ、人物といった外界をどのようにして内なるものに変容させていくのかについて述べてきました。今回は「テリトリリー」を一つのキーワードとして、幼児の持つ「内→外」意識の変容について考えて行きたい。なお次回は「コントロール感について述べる予定である。

テリトリリーには、領土、なわ張りと言われた説が一般的に行われることが多い。それ故に、テリトリリーは所有、専有という言葉と関係が深い。この言葉の本来の意味である空間の所有、専有という一面を超えて、物質的な所有、対人間的な所有という面をこの言葉に加えることも可能かつ私には考える。空間であれ、物質であれ、また人間であれ、自分のモノであれば、それを他者がみだりに侵すことは許されない。この意味において、テリトリリーは私
1) 空間的なタリトリ

(事例 2-1)

活動的な子どもの動きの大いな遊びや、散乱したオモチャなどで、保育室は混乱し、落ち着きがない。Bは私の手を取って家に帰ろうと言う。私はBの気持ちに共感でき、しばらく私の膝に乗せておく。少し落ち着くと、Bは近くにあった空のダンボール箱を見つけ中に入る。それを見た他の子が来て、中にろうとうすると、猛烈な勢いで怒り拒絶する。そしてFBに入ったときのように、ホッとした顔をして、箱の中から十分近く辺りを見ている。

写真1

この事例は、入園後約一月経ったBの様子の一コマ。
での。前の年、一年間、兄の送迎でえられてしまっ
たBは、自分が保育園に行くのを楽しみにしていた。し
かし、いざ自分がその中にに入ってみると、以前思い浮か
べていたイメージと大きくずれる所があったのであっ
た。日が経つにつれて、登園をいやがるようになってき
ていた。

集団の場に初めて身を置いたBにとって、少し誇張す
れれば、保育室は闇闇に例えられたのではないだろう
か。そしてその中に一人、裸で入れられてしまったよ
うな感じが、Bにはしていたのではないだろうか。Bはそ
のような状態の中で、とりあえず自分の身を守るモノが
必要だったのではないかと思う。丁度、実際に闇闇にお
いて、牛に追い立たれた闇闇が、安全地帯に逃げ込むのと
同じである。その場から自分を守り、隔離する空の箱に
自分を立て直そうとBは努めていたのだと思う。

ここで大切なことは、Bが空箱に入り、そのテリト
リーを主張したことを、辺りの子どもたちが認めたことであ
った。"認めた、っていうも、その場面では、他の子ども
たちがその箱に入ろうとするのをBが拒絶し、そのBの様子
を見、他の子どもたちはその空箱に入ろうとするのをやめ
た。と言えるのが実際の有様である。しかし、言葉による
非言語的な会話（交流）が意味を持っているのである。も
しくは、いくら空箱に入りても、他の子が無理矢理
に入って来て、心が追い出されてしまうというような状
態が続いていたならば、この空箱が、Bにとって、テリト
リー」として全く意味をなさないものとなるであろう。テ
リトリーとは、他人をそれをテリトリーと認めて初めて
成立するのである。Bが空箱をテリトリーとして主張
し、それを他の子どもたちが了解するということ、すな
わち自分の持ちを通すという一件事によって、Bは最も
初期的な、その場に対する自己存在感を持ったに違いな
い。この事は、後に続く生活にとって、非常に重要な意
味があると思われる。
ある。

HとKは、椅子で囲んだ空間を作って、その中に二人で入り遊んでいる。そこで男児三人がやって来て、中に入り込むとすると。二人の女児は少し迷惑そうな顔をするが、強く拒否しない。男児は、次々と本を持ち込んで、中にたまる。写真3

この事例の写真を見てもわかるように、の閉空間に共にいる子どもたちも、何か一つの遊びを一緒にするといったような、共通のイメージがあるというわけではな

い。一人ひとり勝手な事をしているのが、お互いが相手の嫌がることはしない、というような親近感がその中にある。この親近感は、物理的に身を近くに置いた結果でもある。そして、身を近くに置くことが、また親近感を生むという一つの循環を私は見る。このメンバーは常

に固定しているというわけではなく、あまり大人数にならないという一つの法則の下に、日により、時により入らないといいう一つの法則の下に、日により、時により入


写真3
物質的なデリトリ

(例文2-5)

「Kが来ると、Kちゃんならいよいよ」と言って一冊分けていく。

私は部屋に散乱している粘土を片付けている。するとGが近くに来て、私の様子を見ていないので、粘土でダンゴを作ってる。「もっと」と言うので、私は何食わん作ってGの両手に乗せてゆっくり。手にあふれんばかりのダンゴを持って、ニコニコしている。手からこぼれそうになったので、友達が親切つもいで、牛乳バックを作って手をかごに移してやろうと、手の上のダンゴを取ると、Gは泣きそうになる。私は嬉しそうに、膝の上に乗つダンゴを持って、ほっとしている。降園時には、本当のダンゴを持って帰ってしまう。

両例文とも、モノを手に集めようとしている子どもたちの姿が見られる。この子どもたちにとっては、それが何かの役に立つといったような実用性よりも、量そのものの意味を持っています。もちろん、量さえあれば手に持つものは何でもよいという訳ではない。この場合、Gが手に集めたのは本である。まだ字が読めない三歳のGにとっては、本とは、大人が自分の時間を、内容に読んでくれる物である。それ故、一冊の本には、内容を読めなくなとも、楽しむ時間が内包されている。価値あるモノなのである。

Gの場合の粘土は、私が作ってやった物である。Gに
だって思う。

(3) 対人間的なテリトリ
子どもとの対人間的なテリトリ意識は、ある人物に対する独占という形をとる場合が多い。ぼくのお母さん、わたしだれもある私を求める子どもの姿は、日常よく見られるところである。親や教師の存在は、特に幼い子どもにあって、大人が存在することに信頼する。自分にとって内なる大人を独占できるたとえ子どもが感じられたとき、その子どもは、自信に満ちて、喜びにあふれた輝いた者となり、子どもにとっての周囲の世界の見え方は、全く異なったものとなるからで、ありよう。

家庭児Bにしてみれば、団体の場合において他の子どもが、自分の父親と親しく遊ぶことは、自分の父親を取られたように面白くないだろう。家にいる時のような父親を保育園においても求める。私を独占しようとしている。それはまた、他の子どもに対して、自分のテリトリの主張でもある。

次に、このような言葉による主張ではなしに、ヒモは子どもの好むモノの一つで、素朴な道具の一つであって、物と物を結わえたり、縛りつけるした事が出る。ヒモは「縛張り」、「束縛」という言葉にも現れているように、「所有」という事と関連が深い。言語以外のもので自分の思いを現す子どもは、時にヒモで人を所有しようとすることが見られる。
私が保育室のイスに座っていると、縄上のヒモを持って来て、私の両足をググル巻きにして、もう、逃げられないぞ！と言っていたので、

【例 2-19】

Y, S, Aの三人は、保育室に来た私を見つけると、飛んで来て、三人で私の足にしがみつきます。

【例 2-10】

大好きな実習生viso、六人の男児が追いかけまわし、どう逃げられないので、足に絆じつにつけて、三ツ足をヒモで縛り付けて、足にまとわりつく子どもは多い。足の自由を束縛することとは、相手をその場に留まらせる事である。実際に、私を束縛にしがみつける子どもは、子どもにしがみつけると、その場に留まらざるを得なくなる。子どもにもしてみれ

【参考文献】